

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

法政大学史学会々報(7号)

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

81

(終了ページ / End Page)

89

(発行年 / Year)

1955-06

法政大学史学会々報

会務報告

昭和二十八年十一月一日

史蹟調査「相模国分寺跡とその周辺」

藤井・板沢・丸山・河原各教授、芥川助手卒業生七名、在学生五名参加。

海老名町役場会議室にて昼食、文化財委員児島氏より一時間にわたり、相模国分寺跡とその周辺についての講話あり、順路により最後まで御指導を受く。午後四時半散会。

十一月十一日

法政大学史学会総会及例会 午後六時より於十四番教室

総会

開会の辞 宮前委員

議長選出 議長佐藤委員 副議長堀切委員

会計報告 宮前委員

行事報告 佐藤委員

例会

会長挨拶 板沢教授 (藤井教授御欠席により)

講師紹介 板沢教授

講演「マルチン・ルターの宗教改革の源について」

東京大学教授 山中謙二先生

きては、殆ど世に知られざるもののみなるを以て、従来その研究あるを聞かず、また邦文と対照すべき蘭語原文の存するもの、却つて当時のものに多きに鑑み、本論文に於いて著者が専らこれらに力を注げるは寧ろ宜しきに叶ひたりといふべく、以て本論文の真価を軒輊するに足らず。その注解の如きは、日蘭交渉史に深く沈潜せる著者にして始めて之を善くすべく、主論文と共に遺憾なくその努力を發揮せるものといふべし。

彼上の理由に依り、本論文の提出者板沢武雄は文学博士の学位を享くる資格十分なりと認む。

昭和二十九年十月卅日

審査委員 (日本大学教授)

石田 幹 之助

同 (東京大学教授文学博士)

岩 生 成一

同 (法政大学教授)

藤井 甚 太郎

十二月二十八日

「法政史学」第六号（法政大学史学会々報改題）藤井甚太郎先生古稀祝賀記念特輯 発行。

昭和二十九年三月二十七日

新制第四回卒業式挙行さる。卒業生一同より「謫史備要」一冊寄贈を受く。

四月二十八日

法政大学史学会例会 午後五時半より、於四番教室

例会に先だつて、単位履修方法に変更ありたるにつき、三・四年生に対して、単位取得方法の説明あり。

新入会員歓迎会（例会）七時二十分より

司 会 矢口委員

開会の辞 伊藤委員

会長挨拶 藤井教授、同時に各教授方の御紹介あり

卒業生代表挨拶 酒巻正三郎氏（新制三回）

卒論要旨発表 堀切康司氏（新制四回）

懇 談 自己紹介

閉会の辞 伊藤委員

出席者 藤井・竹内・丸山・河原各教授 岩生・関野各講師

芥川助手 卒業生八名 在学生四十二名

右終了後委員選出

（四年）吉川・石黒・西村（三年）筒井・新井・富取の諸

君と決定

五月二十六日 法政大学史学会委員会

「法政史学」第七号編集に関する件

総会開催に関する件

史蹟調査に関する件

卒論指導会に関する件

藤井・板沢・竹内・丸山・河原各教授 芥川助手 卒業生 在学生委員九名出席。於研究室 午後五時半—九時半

六月十二日 法政大学史学会総会及特別講演。於三番教室

総会後本学講師齋藤忠先生の「平城京址発掘について」と題し

春以来問題になりつつある平城京址発掘調査に参加された先生の御話しをうかがい、厳密、正確な歴史地図の必要性、古代史

と考古学の関聯性など幾多の問題を心に銘記しつつ散会した。

八時半終了。

六月二十七日 史蹟調査「川越方面」

入梅の季節でもあり、危ぶまれていた天候は現地についても少しばしは雨に見舞はれた。しかし全行程を元気で踏査し無事に予定を終了した。

〔行程〕 仙波河岸・喜多院・川越城址・三芳野神社・氷川神社

・時鳴鐘・養寿院 午后四時解散

参者 加藤井・板沢・竹内・丸山・河原各教授 芥川助手、卒業生

在学生計二十名

十一月十四日 史蹟調査「鎌倉方面」

〔行程〕 円覚・建長・東慶寺・鶴岡八幡宮・若宮・国宝館

八幡宮社務所にて昼食、社務所所蔵の古文書卷子本にて、古文

書演習、午後三時解散。

参加者 藤井・板沢・竹内・丸山・河原各教授 芥川助手 卒業・在学生二十一名参加

十二月四日 第六回法政大学史学会公開講演会、午後一時半—五時 於本学第二講堂

自由民権運動に関する一考察 講師 小西 四郎
マルコ・ポーロより伝へられた元寇に関する一考察 教授 河原 正博

日本中世の検断について 講師 佐藤 進 一

なお河原先生には、急用にて御帰省なされた為中止となり残念であった。次の機会には是非拜聴したいものである。冬季ではあつたが快晴に恵まれ、参加者は二百名を超えんばかりの盛況であつた。

昭和廿八年廣史学科卒業論文題目

八王子千人隊の研究

田野倉 進
土屋 正

中世都市の成立とその近代的意義

西山 信 一

近代農民史の研究 —特に明治初期に於ける—

大矢木 昌子

江戸時代末期に於ける西秋留村を中心とした検地及び年貢について

天野 行 男

明治時代に於けるプロテスタント教会の形成

堀 切 康 司

中世封建制度の考察 —特に組織を中心として—

上原口 一 男

我が国に於ける初期荘園成立の歴史的意義
壬申の乱について

武田信玄の民政について
国司制の類廃と年給について

江戸時代後期の農民 —特に「甲斐天保騒動」をめぐって—

日本祭礼の考察 —阿伎留神社のまつりを中心として—

戦国大名領の形成と土一揆
五・四文化運動の歴史的意義について

—特に反儒教思想の形成を中心として—
西洋中世初期に於ける古代文化の消滅過程
イエスの史的意義

英国に於ける宗教改革の特質と其の歴史的意義

昭和廿九年三月文学部史学科卒業論文題目(通教)

茨城県における仏教の歴史的発達について

情島(瀬戸内海)の歴史的変遷について

水戸藩の海防と山野辺義観

朝倉氏と越前

筑紫古代史の研究 —耶馬台国の位置について—

近江三座の一考察

先史時代の郷土研究(滋賀県長浜市)

志村 正 幸
田熊 光 重

若林 正 一
大貫 幸 男

竜沢 富 昭

佐藤 久 夫

染川 剛
松沢 悟 郎

田中 年 子
大堀 昭 治

宮前 吉 雄

前田 誠 徳

玉井 律 夫

田所 わ ぐり

宇野 正

光山 利 雄

大野 多 米 男

堀 隆

後期封建社会の崩壊とその考察
近世における近江麻布業の発展とその経営形態

平田 貢

近世都市と町人の性格

喜多尾 正枝

— 八幡町御朱印騒動を中心として見たる —

深尾 源次

陶都常滑の歴史

新海 公夫

農村の生産振興に対する歴史的反省

北村 元

伊賀黒田荘の変遷について

隱岐 孝夫

参河刈谷藩の一揆とその影響

杉浦 古一

土佐流人研究序説

齋藤 美江子

島原の乱の原因

吉田 忠孝

久留米藩における百姓一揆の研究

佐々木 高信

敦賀商港の擡頭とその発展

中村 昭一郎

歴史地理的に見た里見氏の発展

金丸 淳

土一揆を中心とする室町末期の庶民社会の動向

中島 久雄

幕藩封建体制の崩壊について

中島 了

徳川幕藩封建社会下の農村問題

伊藤 哲也

— 主として社会、経済史の立場より —

国家形態と政治機構から見た日本封建制

桜井 俊二

徳川封建社会の崩壊過程について

清水 房枝

上毛地方における古墳の研究

堀越 武夫

甲斐の弥生式文化論

土橋 通

千葉県における藩政について

竹内 文雄

民衆の立場から見た明治維新
山口藩の文教政策

大口 好文
榎木 久雄

— 萩、山口両明倫館を中心として —

郷土先史文化の考古学的考察

福原 栄美

西欧絶対主義の特色と明治絶対主義

茂原 健

— 明治初期の特色について —

満洲事変とその影響

本間 慎事

高岡の古城址、城下町の史的考察

茅原 政雄

近代から見た三原市を中心とした陸上交通路

宝子 丸明

上総のかたまり法華に関する諸考察

渡辺 淳己

廃藩置県を繞る農民一揆の形態について

沖野 善正

宗教的に見る親鸞の人間像

田倉 房子

郷土における封建搾取について

芝田 亨一

— 主として租税、小作料、地評を中心として —

吉原 宿の研究

八木 正明

— 近世日本交通史の二駒 —

戦国時代の経済と科学思想

七条 昱

十九世紀前半におけるイギリス民主的諸制度の発展に

黒田 烈子

ついて

田口 不二子

ポール・セザンヌについて

石原 彰

英国産業革命史

石原 彰

— 羊毛工業を主とせる —

西欧中期より近世初頭における土地支配関係の変質過程

新夕 俊夫

の一考察

新夕 俊夫

産業革命と英国に於ける自由主義思想の発展
原始キリスト教の世界宗教としての発展について
小寺 牧男

フランス革命の思想史的背景
青 山 豊
高木 春枝

— ジヤン、ジャック、ルソーの啓蒙思想を中心として —

昭和廿九年九月史学科卒業論文題目 (通教)

高校「世界史」に関する一管見

幕末明治維新に於ける山口藩の行動

徳川幕府の鎖国政策についての一考察

足利における染織業の発達

封建時代後期における栃木町周辺農村の研究

天平文化に対する一考察

幕末体制下の農民解放運動

— 松本莊左衛門を中心として —

近代社会形成の起点

— イギリスにおける資本制生産様式成立の歴史的起点について —

初期におけるアメリカの移民について

鎌倉時代の彫刻について

近代社会における庶民の文化活動より見た根岸式香の活動についての研究

池田藩における庶民教育

歴史教育について

日本における遺伝学の発達

真宗の成立と庶民階級への発展について
熊岡 哲雄

古代社会发展過程における遣唐使の役割について
小堀 元一

景観の変遷について
手島 宏治

— 杵築城下町とその周辺の場合 —

維新革命の原動力を論ず

千葉県長生郡日吉村、横穴古墳郡の研究

明治維新における広島藩の行動

山村聚落の発達と転轍師制度の研究

日本演劇史の変遷について

古代社会の農業の推移

江戸時代町人の教育について
— 特に町人的人間像をめぐつての考察 —

越前古窯の歴史的研究

江戸時代の百姓一揆

— 竹居村小前騒動 —

我が国の原始時代の住民の生活についての一考察
相山 文雄

我が国における「隠れ切支丹」の実態とその背景
山口 恒義

— 特に筑後の国今村を中心として —

ジョン・カルヴィン — 生涯と国家観 —
山内 典博

オランダの日本貿易独占過程について
作本 一成

彦崎貝塚の報告
佐々木 竜夫

— 岡山地方の縄文土器の編年上の位置 —
池葉須 藤樹

宗 嘉法
原田 真一
岩淵 正雄
川田 昇
国 乗 登
横村 孝二
早川 重雄
竹内 俊雄

北爪 宣武
石川 清一
大野 昌三
富田 泰司
足立 裕
中村 慎吾

受贈刊行物

(自昭和二十八年十一月
至昭和二十九年十二月)

駒沢史学 第三、四号 駒沢大学史学会

立命館文学 第一〇三・四・五号

立命館大学人文学部研究所

史泉 第二号 関西大学史学会

聖心女子大学論叢 第三、四集 聖心女子大学

文北史学 第七・八号 文化史学会

史論 第一・二集 東京女大歴史学研究室

人文論究 第四卷三号 関西学院大学文学会

史峰 第一卷一号 大阪市大歴史学研究会

日本女子大学紀要 第三号 日本女大

古代研究第一 歴史学研究报告第二集

東大教養学部

歴史 第六・七輯 東北史学会

文化 第十八卷四号 東北大学文学会

法政二高 歴史研究 第三・四号

法政二高歴史研究部

神道宗教 6・7 「折口信夫博士追悼号」

神道宗教学会

愛媛大学歴史学紀要 第二輯

愛媛大歴史学研究室

九州工大研究報告 第二号 九州工大

関西大学文学論集 第三卷四号 関西大学

日本奥州国伊達政宗記並使節紀行

宮城県史編纂委員会

駿台史学 第四号

駿台史学会

武蔵国多摩郡小川村 小川家文書目録

1 (書冊之部)

2 (書状之部)

明大図書館

法経論集 第一号

静岡法経短期大学

大阪大学文学部紀要 第三卷 大阪大学

近代 神戸大近代発行会

史料館所蔵史料目録 第三集 史料館

浪速大学紀要 第一卷 浪速大学

熊本大学教育学部紀要 第二号 熊本大学

東方学 第八輯 東方学会

国学院雑誌 特輯号 国史学 国学院大学

大隈研究 第四号 早大大隈研究室

人文学報 第八・九 東京都大人文学会

文科報告 第三号 鹿児島大文学部

名古屋大学文学部研究論集 VII 史学 3

名古屋大学

山代忌寸真作

奈良県教育委員会

会報 6

名古屋歴史学会

愛媛大学歴史学紀要 第三輯 愛媛大学

東方古代研究 第四号 東方古代研究会

大和文化研究 第七号 大和文化研究会

日米文化交渉史 2 通商産業篇

開国百年記念文化事業会

明治文化史 2 法制篇

3 風俗篇

5 学術篇

12 生活篇

明代滿蒙史料李朝実録抄 第一・三册

東大東洋史研究室

仏師運慶の研究 小林剛著

奈良国立文化財研究所

法政大学史学会々則一部改正

通信教育部史学科、大学院設置等新らしい体制に應ずるべく、会則の一部を昨昭和二十九年六月十二日の総会に於て改正、承認され即日施行されることになった。

左に改正部分を含む条項を紹介する。

会員

第五条 この会は本学大学院及び学部の史学科教員・学生・卒業生及び通信教育部学生・卒業生、その他特に入会を希望する者を会員とする

第六条 この会の会費は年額四百円但し卒業生は二百円の会費を納めるものとする

役員

第七条 この会には次の役員を置く

会長 一名 本学史学科主任之に就く

顧問 若干名 会長がこれを推薦する

委員 若干名 大学院及び学部史学科教員と在学学生委員及び会長の委嘱

による卒業生を以てこれに充てる
その任期は一年とする但し重任を

妨げないなお会長は委員中より若干名の常任委員を委嘱する

くあとがき

第六号発刊以降、昨年中に発刊する予定が、約半年も遅れてしまった事は、何とも申し訳がありません。

しかし、多くの力作が寄せられたことは、喜ばしき次第で、これを指標、他山の石として、会員諸氏の一層の研鑽を望むや切。

会員名簿を整備の上再刊したいと計画中です。住所、勤務先の変更の場合は必ず研究室宛御一報願います。
なお会費の納入方も是非御願ひ致します。

前号の残部僅少につき、希望の方は実費送料共一〇〇円送金の上、研究室宛申込んで下さい。

執筆者紹介

- 丸山 忠綱 本学教授
- 河原 正博 本学教授
- 芥川 童男 本学助手
- 金子 昭式 昭和廿五年度卒
- 安岡 昭男 本学大学院学生
- 堀切 康司 昭和廿八年度卒

法政史学 第七号

昭和三十年六月二十一日印刷
昭和三十年六月二十五日発行

編集 集 冊

東京都千代田区富士見町三ノ一
法政大学文学部史学研究室内
法政大学史学会

代表者 藤井甚太郎

印刷人

東京都豊島区椎名町六ノ二、二八三
三朋印刷製本株式会社

88 頁上段	87 頁中段 7行	8281 頁下段 7行	カ7269 ラ頁下段 7行 追記3行 終リ	66 頁上段 9行	65行 頁上段 11行	63 頁下段 最終	57 頁下段 7行	行々 終リカラ 6	43 頁下段 5行	519 頁終リ カラ	頁・行
文北史学	南玉郡川柳	十一月十一日 参加者	頼挫 重	何公使の返簡	明治十三年五月	十月九日 「題に關する」	「琉球所屬問	介 志賀常鑑高陸	翌十九年	それと共に	誤
文化史学	南埼玉郡川柳	十一月十八日 参加者	頼坐 重複	何公使宛返簡	明治十二年五月	十月初九日 「關する」	「琉球帰屬に	志賀常陸介	十九年	それと共に	正